# 詠む広場

## 毎日俳壇

### 小川　軽舟　選

図書館の閉館時間日脚伸ぶ
愛西市　小川　弘
△評▽図書館で過ごすのが日常の一部になっているのではないか。閉館時間の明るさに季節の進行を実感して家に帰る。

切通し抜けて寺訪ふ初音かな
高山市　直井　照男
△評▽谷間の寺まで切り通しを抜ける道がある。折しも山からうぐいすの初音が聞こえた。

枡酒の杉の香りよ春の雪
川越市　益子さとし

梢より土に親しき寒雀
千葉市　畠山さとし

天狼の着き眼や爛々と
延岡市　九鬼　勉

関東煮昔話をひとしきり
大和高田市　楠　伸治

春寒や記憶の底の野辺送り
瑞浪市　岩島　宗則

縁側に漱石読めば日脚伸ぶ
北九州市　寶満　光保

新聞紙濡らし千切りて初箒
香川　佐藤　浩章

風光るぽんぽん船の入江かな
高槻市　黒田　豊子

### 西村　和子　選

傘ひらく舞妓へふはり牡丹雪
兵庫　小林　恕水
△評▽一読はなやかな色彩が目に浮かぶ。和傘の色、振り袖と帯の色、花びらのような雪の白。想像の楽しみを与えてくれる。

鶯餅家族会議のために買ふ
下野市　石井　光
△評▽家族会議とはものものしいが、明るい話であることを季語が語る。議題は何？

長風呂や寒柝の音消えるまで
志木市　谷村　康志

正解は一つにあらず春二番
京都市　松尾　昌典

朝まだき白湯に春立つ甘さかな
大阪　芹澤　由美

追伸に猫のことなど寒見舞
川崎市　折戸　洋

生き生きと漁火遠し春兆す
姫路市　板谷　繁

向ひ合ふ虚子と立子の墓に春
神奈川　中島やさか

灯を消さばもの言ひさうな神楽面
郡山市　井上　博

参道に買ふ出来立ての蓬餅
枚方市　門川　清秀

### 井上　康明　選

龍太忌や百戸の谿の春の月
相模原市　小山　鞠子
△評▽飯田龍太忌は2007年2月25日。その第1句集『百戸の谿』を詠み込んで、追悼の思いを明るくストレートにうたう。

空焦がす煙を照らし山焼かる
奈良市　奥　良彦
△評▽阿蘇山などの噴煙だろう。その噴煙を照らし、山焼きの炎が裾野から尾根へ伝わっていく。

泥の黙瓦礫の黙や春寒し
国分寺市　野々村澄夫

シーサーの口にも阿吽春疾風
東京　榎並しんさ

島あげて歌ふ一人の卒業歌
明石市　島谷喜代孝

潮待ちの漁師集まる春疾風
相模原市　はやし　央

旅の子の短きメール春浅し
臼杵市　村上　玲子

冬夕焼旅の半ばの古都歩く
久留米市　持地　恒美

加賀友禅の紅流す雪解川
川越市　益子さとし

竹林の撓ふ音あり春一番
名古屋市　平田　秀

### 片山由美子　選

薄氷の吹き戻さるる時ふるへ
東京　山口　照男
△評▽風のなすままに水面を動いている薄氷。ふるえているととらえたところに今にもとけてしまいそうなはかなさが感じられる。

入院の後空白の古日記
和歌山市　藤池　芳子
△評▽思いがけない入院だったのだろう。空白となった去年の日記帳を見返しているのだ。

閉店の記事の小さく春隣
愛知　高橋　一枝

搗くたびに草餅らしくなりにけり
湖西市　宮司　孝男

落葉掃く創立百周年の門
土浦市　今泉　準一

白魚の命ひしめき目のひしめき
海南市　塚月　凡太

二三輪あとのつづかず梅寒し
さぬき市　景山　典子

今年またいつものところ蕗の薹
佐倉市　松戸　文彦

靴の跡残る三和土や冴返る
香芝市　河野　嘉雄

集落に残るは二軒冬灯
西海市　まえだいっそう

## ことばの五感

# 青虫の使命

川野里子

・三月の真っただ中を落ちてゆく雲雀、あるいは光の溺死　服部真理子

台所の壁を小さな青虫が登ってゆく。たぶんブロッコリーに隠れていたのだ。数日すると茶色いものが壁に貼りついていた。よく見るとサナギで、角らしきものも備えている。冬の最中を生き延び、一体どれだけの距離をここまで運ばれてきたのか。冷蔵庫を脱出し、サナギになったのは奇跡だ。しかしこのまま死ぬ可能性も高い。サナギは壁のシミとなって生死の境にシンと静まっていた。

そして先日、雪が降った朝のこと。1頭のモンシロチョウが壁に止まっていた。サナギは透明な抜け殻になっている。日が昇ると、光の来る窓へ飛び移りしきりに羽ばたく。この子は青虫の時から何も口にしていない。砂糖水を差し出すが見向きもせず窓ガラスにぶつかり続ける。

もがき続ける様を見ているうちに、この子には何か遂げねばならぬ使命があるのではないかと思えてきた。出会いたいものがあり、遂げねばならぬことがあり、それは光の来る方にある。そのためにサナギになったのだ。しかし外の気温は氷点下2度。たちまち凍え死んでしまう。

もし私がこの子ならどうしたいか。この窓ガラスの向こうの光に向かって思い切り羽ばたき、そうか、世界はこんなところだったのか、と納得したい。そう思えた。窓を開けた。雪に覆われた空間に飛び出したモンシロチョウは、落ちてくる雪片に逆らいながら上へ上へと羽ばたく。たちまち舞台に飛び出した踊り子のように小さくなり、消えた。

（かわの・さとこ＝歌人）